

市長の伊賀じまん



— 伊賀の気風を感じる焼き物 —

伊賀には、新しいもの、これまでになかったものを求める気風があり、伊賀焼はその代表のようなものだと考えています。日本の長い陶芸史でもこんなにも「ひょうげた（ふざける、おどけるの意味）」焼き物はほかにはないのではと思います。

茶道を愛好した大名に古田織部おりべがいます。桃山時代には、彼の意向を受けて茶陶としての伊賀焼（古伊賀）が作られました。昨年、古田織部没後400年を記念した展覧会があり、展示された伊賀焼の名品「古伊賀花生（銘からたち）」を見に行ってきました。これは、強い火に焼かれて口部分くちぶが破裂し、その破片が胴体に刺さってカラタチの棘とげのようになっています。伊賀焼は「七度焼」とも呼ばれ、高温で何度も焼成する中で、破裂してしまうことが多くあったそうです。この花生も普通の感覚では失敗に見える作品ですが、そこには迫力のある古伊賀のおもしろさが如実に表現されていました。

そのほかにも織部には、「人に譲ることが生爪をはがされるほど辛い」と譲り状に書き添えた「古伊賀花生（銘生爪）」など、伊賀焼を好んでいた話が残されています。古伊賀は、土の味、炎の技、伊賀人の感性が一体となり、茶

▶「伊賀色絵桜図大皿」裏側に「伊賀国丸柱制（製）」印（伊山文庫蔵）



道具や芸術としての評価が確立していったと言えます。

江戸時代になってからも、藤堂藩の方針として伊賀焼（藤堂伊賀）が作られ、各地の大名への贈答品として用いられていました。そして、その後の衰退を経て江戸中期に伊賀焼は再興し、「伊賀国丸柱制（製）」と押印された作品が作られました。再興後の伊賀焼は、行平ゆきひらや土瓶など、庶民の使う日常雑器として盛んに生産され、今につながっています。

現在でも、地域の陶芸家が伊賀焼の新たな実用性を探求して、水を使わずに調理できる鍋などさまざまなものが作られ、食生活を豊かにしてくれています。また、次世代が育ち、他地域から来る陶芸家も増え、若い力が伊賀焼の可能性を広げてくれています。

地方創生の時代、伊賀地域も独自性を出して生き残っていかなければなりません。私たちの地域の伝統や風土には、伊賀焼を見てもわかるように、人とは違うものを生み出す気風を含んでいると思います。人との違いを大切に、また認め合える多様性のある社会であることが、活力となっていくのではないのでしょうか。（伊賀市長 岡本 栄）

防災ねっと

“備える”ということ

布団に入って寝ようとしたときでした。突然、不気味で大きな地鳴りがしたと思えば、直後に「カタカタ」と建物が小さく揺れ始め、次第に「ガタガタ」と揺れが大きくなっていきました。経験したことの無い揺れに恐怖と不安を感じ、動くことさえできず「これはきっと建物が倒れてしまい、体が挟まれてしまうだろう」と思いました。揺れは長く続き、揺れが収まったあとも、次に何をしたらよいのか考えがまとまらず、右往左往する状態だったことを覚えています。



これは、私が東北地方へ東日本大震災の復興支援に向かっていた際、震度6弱の余震を体験した時のことです。防災の仕事に携わる自分が、まさか何もできない状態に陥るなど、想像もしていませんでした。幸い部屋のテレビは固定されており、倒れるような背の高い家具の配置もなく、自身にもけがはありませんでした。（総合危機管理課職員 談）

さまざまな地震の体験記に、地震の瞬間「恐怖で体が動かなかった」「行動しようとする余裕もなかった」「机の下にもぐることさえもできなかった」「何が起きているのかわからなかった」「体の震えがとまらなかった」などと記されています。



また、「家の2階が落ちてきて天井と床の間に挟まれた」「テレビが何メートルも先から飛んできた」「食器棚は固定していたので倒れなかったが、中の食器が全部飛び出し割れた」「倒れた家具で逃げ道がなくなった」などとも記されています。大きな地震が発生すれば建物の中ではいろんなことが起きますが、揺れている間に何かをしようとするのは難しいようです。

地震のときに一番大切なことは、「命を守ること」「けがをしないこと」です。

今一度“備える意義”を考えてみましょう。

【問い合わせ】

総合危機管理課 ☎ 22-9640 FAX 24-0444

介護相談員だより



老健ってどんなところ？

「介護保険施設」と一口に言っても、それぞれに目的が異なることをご存じですか？今回は、一般に「老健」とよばれている介護老人保健施設について紹介します。老健は、「特別養護老人ホーム（特養）」と違い、在宅復帰をめざすための施設で、医師が常勤しており、さまざまな医療ケアやリハビリが行われています。

入所者は、「Aさん、リハビリですよ。」の呼びかけで、作業療法士など多職種の職員の支援の下、歩行訓練、ラジオ体操、ボール投げ、ちぎり絵の制作などに参加します。施設によっては、書道、音楽療法、芋掘りなどを取り入れているところもあります。



ほかの利用者と共に、または個人に応じたリハビリを行うことで、「寝たきりだったけど歩けるようになった」など喜びの声も多く聞かれます。

【問い合わせ】 介護高齢福祉課
☎ 26-3939 FAX 26-3950

伊賀線だより



伊賀線開業 100 周年

伊賀線は、開業してちょうど 100 年の節目を迎えます。伊賀線は 1916 (大正 5) 年 8 月 8 日に現在の伊賀上野駅～上野市駅間で運行が開始されました。1922 (大正 11) 年には、西名張駅 (現西名張郵便局) まで延伸し、その後、伊賀神戸駅～西名張駅間は廃止されましたが、近鉄伊賀線として、さらに伊賀鉄道伊賀線に体制を移行し、運行を続けています。

市民の皆さんの生活を 100 年もの間支えてきた伊賀線ですが、年間利用者は 1966 (昭和 41) 年度には約 414 万人であったものが、2014 (平成 26) 年度には約 151 万人まで減っています。

伊賀線が鉄道として運行を続けていくためには、多くの人の力、市民の皆さんの利用や地域振興への活用による支えが必要です。先人たちの熱い思いと努力によって敷かれた大切な鉄道がこれからも走り続けられるように、ぜひ、積極的な利用をお願いします。

【問い合わせ】 総合政策課 ☎ 22-9663 FAX 22-9672
伊賀鉄道(株)総務企画課 ☎ 21-0863

明日に向かって ～差別をなくしていくために～

あなたにとって「人権」とは？ —人権政策・男女共同参画課—

■このコラムは毎回いろいろなテーマで人権についてお話しています。

人権講演会や人権研修会に参加しながらいつも私が考えること、それは「人権とは何か」ということです。人権とは、性別・年齢・国籍などに関係なく、「人間らしく生きる権利」「平和で自由に暮らせる権利」だと言われることがあります。また、私たちが毎日の暮らしの中で当たり前前に思っている表現の自由・学問の自由・信仰の自由のほか、恋愛の自由なども人権です。しかし、これらははじめから当たり前だったわけではなく、先人たちの努力によって当たり前になりました。世界では、今でも厳しく制限されている国もあり、私たちの暮らしが実は当たり前ではないことを忘れてはいけないと思います。

しかし、日本でもすべての人の人権が尊重されているというわけではありません。例えば、日本に住んでいる外国人には、「言葉の壁」「制度の壁」「心の壁」があるとされています。これらの壁が人権の前にそびえ立ち、地域社会や子どもたちの進学・

就職などに影響を与えています。そのような中で、中学校を卒業できず、一度は高校進学をあきらめて働いていた外国籍の若者に会いました。彼女は二十歳のとき、やっぱり高校に行きたいと思い、働きながら勉強し、3年かけて中学校卒業程度認定試験に合格しました。そして、高校入試を受けて念願の高校生になりました。生まれた場所や話す言葉が違うだけで、当たり前の人権が当たり前ではない人がいることに、彼女と出会って気付くことができました。これらの壁は、簡単になくすことはできません。しかし、すぐには無理でも徐々に壁を低くすることはできると私は信じています。

人のために自分には何ができるのかを毎日の生活の中で考えることは大切だと思います。人権が尊重され、誰もが幸せを実感できるように、自分の心にある壁と向き合い、「人権とは何か」を見つめ直す時間が私たちには必要ではないでしょうか。

■ご意見などは人権政策・男女共同参画課 ☎ 47-1286 FAX 47-1288 ✉ jinken-danjo@city.iga.lg.jp へ